



農村生活のすすめ

第5回：「人間と農業」についてのすこし長いコラム

主席研究員 川井 真

目次

- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. 亘理町訪問～農業の可能性を求めて | 5. 健康農業「亘理いちご畑」 |
| 2. 予期せぬ展開～亘理町訪問に至る経緯 | 6. 農業と経済を再考する～アダム・スミスと農業 |
| 3. 「志を抱いて生きる」ということ | 7. 結び～参加型社会へ |
| 4. 時空を超えて共鳴する協同の精神 | |

1. 亘理町訪問～農業の可能性を求めて

宮城県の南部、阿武隈川の河口に位置する亘理町わたりちようを訪れた。認定NPO法人／国際NGO ロシナンテス（以下 ロシナンテス）の震災復興支援活動に参加するためだ。

ロシナンテスの東北事業部では、子どもたちへの学習支援を目的に「寺子屋」を開設してスタッフを派遣する活動や、仮設住宅で暮らす高齢者の方々を対象に、心身の健康維持・増進を目的とする「亘理いちご畑」という取り組み（健康農業事業）などを継続的に行っている。健康農業事業では、慶応義塾大学とも連携しながら農業に従事することで得られる健康増進効果を分析し、その科学的（医学的）根拠を明らかにしようとしている。これは復興支援活動であるのだが、急速な高齢化シフトと長期にわたる人口減少を経験することになった日本、とりわけ他の農山漁村地域においても、これからの産業や都市計画、社会保障や医療・介護システムのあり方を考えるうえで、とても興味深い研究になるだろう。

ロシナンテス東北事業部では、震災の記憶を風化させないために外部との交流を促進す

る被災地交流事業「東北を歩こう！」という企画の実現や、また閑上地区ゆりあげにおいては、被災地コミュニティ内部における情報の共有と住民どうしの関係の深化を目指した「閑上復興だより」というコミュニティ新聞の作成なども行っている。このような多岐にわたる活動を限られた人員で地道に継続してきたロシナンテス東北事業部のスタッフには、ただただ感服するばかりである。今回の亘理訪問は、健康農業「亘理いちご畑」の活動に参加することが目的であった。

2. 予期せぬ展開～亘理町訪問に至る経緯

ロシナンテス東北事業部と活動をともにすることになったそもそものきっかけは、ロシナンテスの理事長である川原尚行氏と交わした何気ない会話からである。川原氏は、わたしの友人の大学時代からの親友でもあることから、たまには情報交換を兼ねて3人でよもやま話でもしよう、ということになった。因みに彼ら2人は九州大学医学部の同期生で、医師（外科医）でもある。

以前からロシナンテスが東北で活動をしていることは知っていたが、川原氏の活動拠点はスーダンにあるため、日本国内で協同研究をすることなどまったく考えてもいなかった。しかし話を聞いていると彼はスーダンと日本を頻繁に往来しているらしく、また現状認識や問題意識も共通していることから、今後は意見交換や情報交換を密にしながら、なにか具体的な目標を達成するために協同しましょう、という話に展開していった。そして気がつけば、日本の農山漁村地域を活性化するための研究活動を協同で推進していくことで話がまとまっていた。ロシナンテス東北事業部のある亘理町も協同研究のフィールドに追加することになり、まずは川原氏の再帰国のタイミングにあわせて現地視察を実施することになったのである。

3. 「志を抱いて生きる」ということ

ここで少し「川原尚行」という人物を紹介しておく必要があるだろう。上述したとおり、川原氏は医師である。2002年から日本大使館一等書記官兼医務官としてスーダンに赴任するが、そこで目にしたのは、内戦で荒廃した国土と飢えと病に苦しむ現地の人びとの悲惨な生活だった。医師であっても外務省職員という立場では現地の人への医療行為は許されない。彼は誰もが羨む社会的地位と報酬を捨て、無収入で単身（このとき幼いお子さんが3人いた）スーダンに乗り込んでいった。当初はスパイ容疑で拘束されたこともあるとのことだが、その際、「なぜ、こんなこと（スーダン国民の診療）をしているのか？」との質問に、「日本男児だからだ！」と答えたという逸話もある。スーダンでは診療所を開設し、いまも村々を巡回しながら医療活動を続けている。

わたしは川原氏という人物、いや「川原尚行」という人間がとても好きだ。そして心から尊敬もしている。彼は現代という一触即発のリスク化した世界の最前線に身を置きながら、なんの迷いもなく夢を語る。そして、魂を揺さぶるような、湧き上がってくるような“希望”を、絶え間なく全身から放っている。そのエネルギーの源はどこにあるのか。そんな川原氏とロシナンテスの活動を支えているのは、家族と、彼を信頼する仲間たちであった。

4. 時空を超えて共鳴する協同の精神

川原氏はラグーマンである。小倉高校と九州大学ではラグビー部のキャプテンを務めた。したがってロシナンテスのスローガンも「One for All, All for One」すなわち「ひとりみんなの為に、みんなはひとりの為に」である。そして東日本大震災を経て活動の幅が広がり「スーダンに病院を、東北に笑顔を」というメッセージが加えられた。まさに組合の原理、根底に流れている思想は協同組合の理念とも重なり合っている。ロシナンテスという名称の由来は『ドン・キホーテ』に登場する駄馬のロシナンテであり、たとえ駄馬でも集まってロシナンテになれば何かを成し遂げることができる、という希望を託した組織名である。

じつは川原氏と話をしていると、これまでに何度か、賀川豊彦のイメージが脳裏をよぎるという不思議な感覚があった。しかし、それもなんとなく理解ができた。彼はスーダンに医療制度を定着させようとしている。内戦の続くなにもないところに病院や学校を建設しようとしているのだから、それ自体が無謀な挑戦なのかもしれないが、たとえ病院ができて、そこで提供される医療を万人が享受

できなければ意味がない。ストックとフローすなわち富の総量を増し分配する仕組み、まさに持続可能な産業の構築と保険制度のような社会システムが必要になる。またスーダンで彼が活動を続けている地域は農業地帯である。農業を基幹産業として機能させるためには、実り多い豊かな農村をつくり出さなければならない。まさに賀川豊彦が東京医療利用組合を設立し、一方で協同組合保険の創設を夢見た時代、その頃の日本の状況と俄かに重なり合ったのかもしれない。では、その川原氏が東北の地で取り組む「亘理いちご畑」の活動がどのようなものなのか、体験した感想も含めて報告したい。

5. 健康農業「亘理いちご畑」

ロシナンテス東北事業部の活動を総括的に推進しているのは事務局長兼東北事業部長の大嶋一馬氏である。大嶋氏は小倉高校ラグビー部の出身で川原氏の後輩にあたる。川原氏がもっとも信頼を置くパートナーのひとりである。東北事業部が実施する「亘理いちご畑」の取り組みは、健康農業と謳われているとおり、ヘルスケア事業の一環として行われている。仮設住宅に暮らす高齢者の心身の健康状態を農作業によって維持・増進するという、ある意味で実験的かつ挑戦的な取り組みである。それは農作業という行為に完結するものではなく、育てた植物を収穫し、調理し、仲間と語り合いながら一緒に食する、という一連の協同作業を日常に復元することにより、“場”が作り出す相互作用と、間主観的な意識空間が生じることで得られるシナジー効

果などにも着目している。とりわけ川原氏と大嶋氏は「同じ釜の飯を食う」というシチュエーションにこだわりを持っているのだが、たしかに、参加者全員で食卓を囲んでいるとき、親密感と仲間意識が一段と高まっていくのを感じた（写真1）。

これらの活動については、ロシナンテス東北事業部のスタッフである田地野茜さんが直近の映像を編集し、わかりやすい紹介ビデオに仕上げ、「YouTube」と「ロシナンテスのホームページ」にUPしているのので、ぜひご覧になっていただきたい（図1）¹。

（写真1）



ロシナンテス東北事業部 復興支援ブログから (<http://tohoku.rocinantes.org/2013/05/post-3.html>)

（図1）

「健康農業 亘理いちご畑」ってこんなところ！



1 「健康農業 亘理いちご畑」ってこんなところ！
<https://www.youtube.com/watch?v=kXHWkwd1MV4>
<http://www.rocinantes.org/2014/05/tohoku-movie.html>

(写真2)



(写真3)



また健康農業「亙理いちご畑」の活動には、人間にとって農業とは何か、という素朴な問いかけが内包されているようにも思える。大嶋氏は「普段は虚弱な高齢者ですが、畑に入ると急に元気になり、農業経験のなかったロシナンテス・スタッフの農業指導員となって、農作業を丁寧に教えてくれます。ケアする側とケアされる側が逆転するのですね」と語っていた(写真2・3)。なるほど、この言葉が真実であることは経験が教えてくれた。居場所を失い娑婆塞ぎのような感覚にとらわれていた心が解放されるのか、あるいは高度な職業人としての本能が目覚めるのか、それはわからない。しかし自然と共生してきた農の民にしか感じ取ることのできないもの、もっと大きなエネルギーのようなものが、あの場所には充満していたのではないか、という感覚がいまも鮮明に残っている。風土に育まれた農の民は、大地に立ったとき、まるで肉体が自然エネルギーの通り道になっているかのように、自然の力を借りてみずからの気力と体力を再生していくのではないか、そんな気がしたのだが、たんなる錯覚や妄想だろうか。いずれにしても農業という営みは、産業や経済の価値基準だけでは測れない。日本人の農

業とのつながりは、もっと深いところにあるような気がする。亙理の地を訪ねて、あらためて「人間と農業」について思考する機会をもらった。たしかに川原氏が語るように、ひとりの人間として向き合えば、まったく異質な環境と文化をもつ東北とスーダンでさえも、この両者を隔てるものはなにもない。土地と労働が“富”と“健康”を生みだし、おたがいさま、おかげさまの精神が永続的なセーフティネットをつくり出す。これが人間社会の原型、おおもとの姿であろう。

6. 農業と経済を再考する～アダム・スミスと農業

いつの頃からか“富”と“価値”の混同があったといわれる。たとえば土地と労働は富を生み出す源泉なのだが、これらが市場に放り込まれると商品としての価値をもつことになる。結果、現代のグローバルで自由主義的な市場経済と農業との相性が悪くなるのも当然であろう。しかし、その礎を築いたとされるアダム・スミス(Adam Smith)は主著『国富論』のなかで誠に興味深い発言をしている。

スミスは第三篇第一章において

事物自然の成り行きとして、およそ発展しつつあるすべての社会の資本の大部分は、まず第一に農業に、ついで製造業に、そしていちばん最後に外国貿易に投下される。事物のこの順序は、まったく当然のことであるから、いやしくも領土をもつすべての社会においては、程度の差こそあれ、つねに見受けられてきたことだ、と私は信じている。(中略)ヨーロッパのすべての近代国家においては、この自然な順序が多くの点でまったく逆転されてきている。都市のあるものでは、その外国貿易が、高級品製造業つまり遠隔地向けの販売に適した製造業を導入し、そして製造業と外国貿易とがあいたずさえて、農業の主要な改良を生ぜしめたのである²

としている。

また第二篇第五章では

等量の資本で、農業者の資本ほど多量の生産的労働を活動させるものはない。ここでは、労働する使用人ばかりか労働する家畜も、生産的労働者である。そのうえ、農業では、自然も人間とならんで労働する。そして、自然の労働にはなんの経費もかからないけれど、その生産物は、最も経費のかかる職人の生産物と同じように、価値をもつものである。農業の最も重要な機能は、自然の豊度を増すことであり、現にそのようなはたらきがなされてもいるけれど、それよりもむしろ、その豊度を人間に最も利益のある植物の生産へとふりむけるように意図することだと思われる。(中略) 製造業では、自然はなにもしないで、人間が万事を行なう。そして再生産は、それをひきおこす諸要因の強さにつねに比例するにちがいない。したがって、農業

に用いられる資本は、製造業に用いられるどんな等量の資本よりも、いっそう多量の生産的労働を活動させるばかりか、それが用いる生産的労働の量にたいする割合の点でも、その国の土地と労働の年々の生産物に、すなわちその国の住民の真の富と収入に、はるかに多くの価値を付加するのである³

との見解を示している。

たしかにスミスの生きた18世紀のスコットランドやイングランドにおいては、農業の大切さは自明のことであったのだろう。ただ重商主義の拡大はこれを浸食しはじめていた。スミスは『国富論』の冒頭で「必需品と便益品こそが国民の富」と語り、それを“食”・“衣”・“住”の順で強調していることからすると、スミスは当時のヨーロッパ近代国家の動き——まさに昨今の富と価値を混同した歯止めのない自由貿易論——に警鐘を鳴らしたかったのではないか、と想像してしまうのだが、それは誤りであろうか。いずれにしてもスミスが、「生きた自然」と「死んだ自然」あるいは「有機的生産」と「機械的生産」を明確に切り離して捉えていたことは確かだろう。しかし後世の経済学者は、このような一見すると歯切れの悪いスミスの農業に対する見解を、フランソワ・ケネー (François Quesnay) 譲りの重農主義思想の残像として捨象してしまったように思える。その意味において、アダム・スミスの経済思想を——現代という時代に重ね合わせて——再考してみることは、日本の未来を考えるうえにおいても、とても大切なことではないだろうか。

そもそも農業は、それ自体がエコシステム

2 アダム・スミス (著)、大河内一男 (監訳) (1978) 『国富論Ⅱ』中公文庫、p. 10

3 アダム・スミス (著)、大河内一男 (監訳) (1978) 『国富論Ⅰ』中公文庫、p. 568-569

である。太陽エネルギーを取り込んだ植物は、人間を含む動物に摂取されてエネルギー変換を遂げ、さらに動物の排せつ物が微生物にエネルギーを提供して土壌を豊かにする。まさに人間は生態系と食物連鎖のなかに身を置きながら生命系の経済を稼働させる役割を担っていると言ってもいい。なかでも農業者は、自然エネルギーを人間にとって有用なものに変換する技術を持っている。

また、日本人と農業には西欧社会とは異なる独特の関係性や世界観を見出すことができる。そこにはアニミズムが深く関与しているようにも思える。自然すなわち太陽と水と大地に宿る神霊の存在を、農民は日々の暮らしのなかで感じとっていたのではないかと思うのである。たとえば鈴木大拙の『日本的靈性』には以下のような一節がある。「人間は大地において自然と人間との交錯を経験する。人間はその力を大地に加えて農産物の収穫に努める。大地は人間の力に応じてこれを助ける。人間の力に誠がなければ大地は協力せぬ。誠が深ければ深だけ大地はこれを助ける」⁴ というものである。この鈴木大拙の語る言葉は、上述した「まるで肉体が自然エネルギーの通り道になっているかのような」という自分自身が経験した超自然的な感覚を——勝手な思い込みではあるが——追認してくれたような、ふしぎな響きをもっていた。

7. 結び～参加型社会へ

ロシナンテスの活動への参加や川原氏との対話から多くの刺激を受けた。グローバル化が加速するなかで2040年には90億人を超えてくると推計される世界人口であるが、著しい

気候変動や自然資本の枯渇により、近い将来には食糧問題や水資源問題等が顕在化してくることは明らかだ。国土の環境収容力という視座に立てば、日本の人口減少には希望がある、という見方もできるのかもしれない。日本が抱える喫緊の課題は、高齢化問題と生産年齢人口の減少による国際競争力の低下、といったことになるだろう。たしかに現代日本の産業構造や社会システムは成長モデルを背景にデザインされているため——もちろん日本に限定されるものではないが——縮小に転換した場合には脆弱な面が露呈してくる。とりわけ高齢化に伴う医療・介護体制の再構築にあたっては、多くの差し迫った難題を抱えている。すでに生産年齢という人為的な概念に縛りつけられていること自体がナンセンスな時代なのかもしれない。少なくともこれからの半世紀は、リスクを吸収できる社会を創造していかなければならないのではないかと思う。まさに先にも触れた「土地と労働が“富”と“健康”を生みだし、おたがいさま、おかげさまの精神が永続的なセーフティネットをつくり出す」ような、人間社会のおおもとの姿をもった個性豊かな地域で構成される、地域集合体としての国のデザインが求められているのではないだろうか。

さて、「人間と農業」について思考するなかで、ひとつ気づいたことがある。それは農業におけるCSA（Community Supported Agriculture）と賀川豊彦が取り組んだ医療利用組合（組合型健康維持組織）の類似性である。いずれも意識的な生き方を志向するものであり、与えられるものを無意識に享受するのではなく、生活に必要なものを自分たち

4 鈴木大拙（著）（1972）『日本的靈性』岩波文庫、p. 44

でつくり上げ、そのシステムを協同で維持していく取り組みである。安全で安心な食が生産され、再生産されるシステムを、消費者もみずから参加してつくりあげること。疾病や傷害あるいは障害のリスクを軽減するためのシステムを、利用者がみずから参加して健全に維持していくこと。どちらも主体的で自律的な社会システムである。それは幸福とリスクを分かち合うことで維持されるシステムであり、まさに食とケアを基盤とする内発的発展型社会のデザインといえるものではないだろうか。

最後になるが、スーダンの名門校であるハルツーム大学の総合図書館内に、ロシナンテスによって「ジャパンセンター」（仮称）が設立されることになった。その名称は『無東西』、対立を回避し平和を求める円環の思想ともいえるものだろう。亘理では、清水寺の森貫主直筆の掛け軸を囲んで記念撮影をした。この掛け軸がハルツーム大学の総合図書館内に飾られることになる（写真4）。

川原氏とは亘理で多くのことを語り合った。そしてひとつの決意を聞いた。それは「スーダンに農協を！」である。どのような状況

や環境におかれても希望を失うことなく、おおらかに夢を語る姿を見てみると、なんとなく「信じ続ければ必ず夢はかなう」という気持ちにさせられる。植木枝盛が語った「未来が其の胸中に在る者、之を青年と云ふ」ではないが、まさに川原氏は青年そのものである。微力ながら——生涯をかけたライフワークとして——お手伝いさせていただこうと思っている。

（参考文献）

- ・アダム・スミス（著）、大河内一男（監訳）（1978）『国富論Ⅰ』中公文庫
- ・アダム・スミス（著）、大河内一男（監訳）（1978）『国富論Ⅱ』中公文庫
- ・鈴木大拙（著）（1972）『日本的靈性』岩波文庫
- ・ガストン・バシュラール（著）、岩村行雄（訳）（2013）『空間の詩学』筑摩書房
- ・エドワード・レルフ（著）、高野岳彦・石山美也子・阿部隆（訳）（1999）『場所の現象学』筑摩書房

（写真4）

